

1 事業報告書（様式第8号）

「ESD・SDGsから地域の未来を考える会」事業報告書（令和7年度）

事業名 私たちはどこから来て、どこに向かうのだろう

団体名 ESD・SDGsから地域の未来を考える会

担当者名 岩堂 秀明

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

(1) 岡山市立角山小学校（ユネスコスクール指定校）教職員研修

① 主題：ESD・SDGsと学習指導要領 ②日時：4月30日（水）③場所：岡山市立角山小学校 ④参加者：教職員約14名、本会4名 ⑤内容：「ESD・SDGsから地域の未来を考える会」代表の岩堂秀明が岡山市立角山小学校（ユネスコスクール指定校）において、学習指導要領における「ESD・SDGs」に関する記述及び、OECDの提唱する学力・キーコンピテンシーについて講話する。⑥評価：教職員は、文科省の提唱する「生きる力」「学力」「学力の世界的潮流」、「ESDにおける批判的思考」等、ユネスコスクール指定校におけるESD・SDGsの基礎的、専門的な事項について再確認すると共に、理解を



深めることができた。SDGs：4 質の高い教育をみんなに

(2) 岡山市立上道中学校区幼小中教職員人権研修会（小・中学校はユネスコスクール指定校）



①主題：「ハンセン病とESD・SDGs」 ②日時：7月31日（木）13:30～15:00 ③場所：岡山市立上道公民館 ④参加者：教職員90名、本会：12名 ⑤内容：ハンセン病国立療養所邑久光明園から、太田由加利学芸員を招き、人権研修会を行う。（主催は学校園で本会は後援）※元患者の山本英郎氏（副自治会長）をお願いしていたが、体調不良のため不参加）太田由加利学芸員から、ハンセン病とESD・SDGsについて学ぶ。⑥評価：中学校区教職員の人権研修会に地域住民も参加したことは開かれた学校・教育課程とも関連し意義深い研修会となった。講師の太田学芸員が元患者の生活に入る込む中で、偏見がなくなっていく過程を話され感銘を受けた。様々な元患者の方の事例をお聞きし、差別や偏見のない共生社会に向けた内容の濃い研修ができた。

SDGs：3 すべての人に健康と福祉を、4 質の高い教育をみんなに 11 住み続けられるまちづくりを

(3) 岡山市立角山小学校「総合的な学習の時間」支援「歴史学習とESD・SDGs」

①主題：角山探検隊 ②日時：9月9日(火)、16日 ③場所：岡山市立角山小学校 ④参加者：15名



(3・4年生10名、教員2名、本会3名) ⑤内容：吉田 誠(本会)が、第1回上道ライスセンター、第2回津宮八幡宮と古墳について講話をする。⑥評価：前半は、プロジェクターを活用し、児童の疑問について回答及び探求課題提供をする。後半は、児童の報告、質問及び感想を聞き説明を補足した。※探求活動の評価：古墳の石をどのように運んだかについて、「コロの実験」においてはどの児童も興味を持って積極的に参加することができた。単元の最終目標は、「振興祭り」への参加(発表)であるが、大きな動機付けをすることができた。対話的な学習については課題を残すが、主体的に課題を考え解決しようとする態度も見られ、さらにより深く自主学習をしたい等の意見もあり、好ましい課題探求のための学習ができつつある。



4 質の高い教育をみんなに 11 住み続けられるまちづくりを

(4) 共生社会とLGBTQの研修会

①主題：共生社会とLGBTQの研修 ②日時：9月26日(金)10:00~12:00 ③場所：岡山市立上道公民館 ④参加者：23名(地域住民13名、本会10名) ⑤内容：「ももにじ岡山」代表 市川明美氏を講師として、LGBTQについて(当事者から)、共生社会とは、その実現に向けて基本的な知識等について学ぶ。⑥評価：まず何より大切なのが、LGBTQや人権教育についての正しい知識を身につけること。自分の先入観や思い込みに気づき、多様な人や文化に触れて視野を広げること。LGBTQのリテラシー、この問題を自分のこととして受け止め、差別、偏見をなくするためと自分が一歩を踏み出すことを学んだ。地域社会には、様々な状況や状態にあつたりする人々(障害のある人、LGBTQ、社会的な弱者の人等)がいるが、皆が分け隔てなく自己実現を目指し、支え合うことのできる地域社会に目を向ける必要性についてその基本的な知識を学んだ。自分事として捉えることのできる有意義な研修会であった。



をなくするためと自分が一歩を踏み出すことを学んだ。地域社会には、様々な状況や状態にあつたりする人々(障害のある人、LGBTQ、社会的な弱者の人等)がいるが、皆が分け隔てなく自己実現を目指し、支え合うことのできる地域社会に目を向ける必要性についてその基本的な知識を学んだ。自分事として捉えることのできる有意義な研修会であった。



写真：研修の様子

SDGs：4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を実現しよう 10 人や国の不平等をなくそう 11 住み続けられるまちづくりを) SDGs 目標12「つくる責任、つかう責任

(5) 講演会 「上道公民館高齢者生きがいセミナー」



①主題：「今こそ知りたい ESD・SDGs とは」 ②日時：令和 7 年 10 月 31 日（金） 13 時 30 分～15 時

③場所：岡山市立上道公民館 ④参加者：11 名 ⑤内容：本会から岩堂秀明、橋本芳樹、吉田 誠、四谷和義が、ESD・SDGs の概要、環境、共生社会、差別偏見について講話する。⑥評価：参加者は、本会が実践した行事や学びについて発表したことに関するアンケートから、共感したという意見や、参加者自身の視覚障

害における共生社会のあり方を確認した等の意見・感想があり有意義な会となった。

SDGs 17 の目標全てについて触れる

(6) ハンセン病国立療養所邑久光明園現地視察

① 主題：「ハンセン病と ESD・SDGs」②日時：11 月 28 日（金）10：30～15：30 ③場所：国立療養所長島光明園（瀬戸内市）④参加者：12 名 ⑤内容：長島光明園を訪問し、屋 猛司氏（邑久光明園自治会長）から、ご自身のハンセン病とその経過、ハンセン病の差別・偏見の歴史、ハンセン病問題基本法の改正についての取り組み等から学ぶ。講話後、フィールドワーク（監禁室、恩賜会館、藪池物資搬斜路、しのびづか公園等の見学と説明）を行う。（太田学芸員が説明）⑥評価：屋 猛司氏は、「国の誤った情報・施策で国民・患者を欺いた。」と強い憤りを話される。その時受けた差別・偏見、誹謗中傷、国や行政、地域社会から隔離された絶望感からの自治会組織の様々な取り組み（「長島架橋の取り組み」、「らい予防法改正」、「国家賠償請求訴訟」、「優生保護法」）について話された。これらは、人間として放置できない大きな課題であると強く感じた。社会には様々な差別事象が存在し比較は出来ないものの、ハンセン病患者の方が人間扱いされなかった実態は最近になってやっとマスコミ等で紹介されるようになってきている。この問題を自分には関係ないと傍観することは、社会の差別・偏見を助長しているということが分かった。自分事として取り組む必要性を強く感じた。「ESD・SDGs から地域の未来を考える会」としても継続的に学び続けなければならないと強く感じた。



SDGs : 3 すべての人に健康と福祉を、4 質の高い教育をみんなに、10人や国の不平等をなくそう、11 住み続けられるまちづくりを

左：屋 猛司 自治会長の講話風景
右：慰霊塔前で参加者

※2026/02/14 山陽新聞サンタホール 13:00~16:30

主題:「この橋の向こう側」副題: コロナ渦を振り返りハンセン病問題を考える

「邑久光明園友愛会」主催シンポジウムに参加(4名)

感想は、資料



(7) 講演会:「岡山市立浮田小学校児童、保護者 ①主題:「国際化時代の教育と人材育成」
②日時: 12月2日(火)14:30~15:30
③場所: 岡山市立浮田

小学校 ④参加者: 約180名(5、6年児童約90名、保護者70名、教職員10名、本会10名) ⑤内容: 山本 正氏(瀬戸内市教育委員)が、雨森芳洲(あめ

のもりほうしゅう)の教え、国際化時代における学びの留意点、オーストラリア先住民アボリジニの管楽器「ディジュリドゥ」の演奏からの差別と偏見について講話する。 ⑥評価: オーストラリアメルボルン日本人学校校長として勤務した際の様々な経験談、オーストラリア先住民アボリジニについての差別と偏見等について話され、児童、保護者にとって分かりやすく感銘を受けた講話であった。

SDGs: 4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を実現しよう 10 人や国の不平等をなくそう 11 住み続けられるまちづくりを

(8) 本会の取り組みについて「おかやまSDGsアワード2025(おかやま信用金庫主催)」に応募し、入賞した。令和7年12月11日(木)おかやま信用金庫本店において表彰を受ける。



(9) 講演会「岡山市立浮田小学校 6 年生」



- ① 主題：「海外青年協力隊セネガルの太鼓」
- ② 日時：令和 8 年 1 月 30 日（金）14：30～15：30 場
- ③ 場所：岡山市立浮田小学校
- ④ 参加者：35 名（6 年生 27 名、教職員 4 名、本会 4 名）
- ⑤ 内容：左直隆之介氏（岡山学芸館高校教諭、元海外青年協力隊）が、セネガルの太鼓（ジェンベ）の使用目的と演奏、セネガル国や文化について講話する。
- ⑥ 総合的な学習の時間における探求課題を提示され、今後の学びにつなげることができる貴重な時間であった。

SDGs：4 質の高い教育をみんなに 5 ジェンダー平等を実現しよう 10 人や国の不平等をなくそう 11 住み続けられるまちづくりを

2. ESD の視点

① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

- ・様々な事業や研修を通して ESD、SDGs については、とくに自分事として再考することが重要であると考え、実践するきっかけとなった。参加者は、「当事者意識のないところに責任は生まれない」ということを実感することができたのではないかとと思われる。
- ・事業の実施の際には、ESD・SDGs について、短時間であってもリーフレット配布や説明を行った。参加者本人が、本会の事業に参加して学ぶ中で、様々な課題を自分事として考え、小さな事であっても解決に向けて実践する大切さを学ぶことができた。

① ② どのように学び合いを取り入れたか

- ・座学だけでなく、現地視察（岡山市立角山小学校においては、地域の神社や古墳見学から児童の課題発見や問題解決学習に繋ぐことができた。また、古墳の大きな石の運搬方法を考え、教室内でコロを使った運搬などの施行活動を取り入れることで、児童の学びを深めることができた。

③ どのような学びと実践を結びつける工夫を行ったか

- ・ハンセン病国立療養所邑久光明園について、実際に訪問し 屋 猛司 自治会長の講話（生い立ち、ハンセン病に対する差別の厳しさ、解決に向けた取り組み）を学んだ。入居者の展示物や関連施設見学から、悲惨な実態や言葉では言い表せない体験や差別・偏見をなくすための取り組み（人権回復の長島大橋の架橋、らい予防法、優生保護法）を学び、絶望の淵に追いやられている想像を絶する取り組みを話され、差別を目の当たりにすることで、大変感銘を受けた研修になった。
- ・LGBTQ の研修では、当事者団体から当事者の方を招聘して研修をしたり、下石井公園で行われたパレードに参加したりすることでさらなる偏見払拭に努めることができた。
- ・岡山市立浮田小学校（ユネスコスクールの指定校）研修（高学年、PTA）においては、オーストラリア日本人学校長をしていた講師の山本正氏のオーストラリア原住民楽器ディジュリドゥの演奏をきっかけとして人権問題等、児童の学びを深めるきっかけとなった。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

- ・昨年度からの継続的な内容の事業を、月1~2回程度実施した。今年度は、岡山市立上道公民館高齢者セミナーにおいて、ESD・SDGsについて説明と提案をすることができた。参加者は少なかったが、本会メンバーが実践した内容に基づいて提案した。地域において本会やESD・SDGsについての理解が得られつつある。
- ・「共生社会やLGBTQ,」の研修も回数を重ね、研修の深まりが見られた。
- ・本会役員が自ら「ESD・SDGs」について学習し、各領域（ESD・SDGsとは、地域の歴史、共生社会、差別偏見）について講師を務めたことは、本会役員のキャリアアップに繋がり評価される。
- ・「ハンセン病国立療養所邑久光明園現地視察」から、地域の一般の社会人としての主体的な学習不足（自分事としてとらえなければならない）や研修不足からの差別・偏見等が存在することが分かった。
- ・ハンセン病、性的マイノリティに対する偏見や差別が起きるのは、メンタル・リテラシー（知識を理解し、活用する力）の欠如、つまり、様々な事象についての基本的知識不足から来ることが多い事を学んだ。（当事者の方はまず正しく知ることが重要であると繰り返し主張された。また、知識理解だけでは、差別や偏見はなくなる。主体的に研修を何度も受け、この問題を自分事として考える、生きることがさらに重要であることが分かった。
- ・ハンセン病等の学修、さらに共生社会・多様性の学びから、様々な感染症や性的指向の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて差別の解消を推進することの重要性が深まった。
- ・地域のユネスコスクールの指定校（岡山市立上道中学校）の学校運営協議会や学校行事に数回参加し、地域に開かれた学校の取り組み支援や、委員会におけるESD・SDGsについて、積極的に支援することができた。令和7年度の学校教育目標の中にESDについて重点的に取り組む等の文言が記載されるようになっている。
- ・本会の取り組みについて「おかやまSDGsアワード2025（おかやま信用金庫主催）」に応募し、入賞した。表彰式では、丁寧な理念の記述やエビデンス、さらに具体的取り組みが印象的だったという評価をいただいた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域のESDの取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

- ・環境問題に終始することなく、岡山地域にあるハンセン病療養施設や性的マイノリティ当事者団体、様々な歴史的遺構など、身近にある様々な教材に着目し、ESDに関して主体的に学ぶことが大切であることが分かった。
- ・ESD・SDGsについての学習や取り組みは、子どもたちの学校教育だけでなく生涯学習の視点から世代を超えた取り組みを行うことが重要である。そのためには、公民館を活用したが、高齢者の参加が多く、20代~50代の参加については殆どなく、その参加について課題があると自覚した。
- ・角山小学校における歴史学習は、「総合的な学習の時間」に本会から講師として参加したが、当該小学校において、批判的思考やアクティブラーニングからの学びに教師が取り組むようになってきた。また、岡山市立上道中学校では、学校を挙げて持続可能な社会構築のため、子どもたちがその資質・能力を培う取り組みについて前進が見られるようになってきている。教育における持続可能な社会づ

くりのために必要な資質・能力は、批判的思考（クリティカルシンキング）がとくに重要であり、学校教育においては、日々の教科の授業において採り入れた支援・指導が成されつつある。

・参加者は少数であっても、本会の研修に参加することによって、地域から持続可能な社会、共生社会づくりが進んでいくことや、SDGsにおける様々な課題を自分事として捉えることができるようになるきっかけになりつつある。

・令和7年度の事業が単発に終わるのではなく、持続可能な取り組みとなるためには、十分な反省（成果と課題を明らかにする）が必要であり、次年度の取り組みにつなげていくことが重要である。

・ユネスコスクール指定校であっても、ESD についての課題意識や知識理解については学校間、教員間で差異があることがわかった。ユネスコスクールに指定された後、時間の経過と共に校内ではその理念が薄まっている傾向が強く、本会からのESD・SDGsについての働きかけや、さらなる教職員研修の支援の必要性を感じた。

・ESD・SDGsについては、環境について学んだり、環境の改善を行ったりすることであると一面的、部分的に断定して捉えていることが多い。マスメディア等においてもそういう傾向が強い。ESD は、持続可能な社会づくりの担い手を育てるために必要な資質・能力において特に重要である。また、知識理解から活用する力が必要であることがわかった。なぜこのような課題や問題である事象が起きたのか、クリティカルに評価を行い、深く考えることが重要である。取り組みが上滑りで単発的にならないように、社会全体にESD・SDGsについて何度でも問いかける必要がある。

・岡山市立上道公民館の活動に参加したり、利用したりすることで、現在や将来、地域の人々が幸せに暮らすことが出来るように世代を超えた取り組みが今以上に必要である。本会の取り組みから、地域に渦をつくり、絆を取り戻すことをねらったが、まだ不十分である。また、高齢者だけでなく、世代を超えた取り組みに課題が残る。

・難しいことではあるが、参加の際、事前に基本的事項（研修主題やそれとESD・SDGsとの関連）について学修したり、疑問点等をもって参加したりすることは、個々の主体的研修をより充実させる。参加者によっては、主題に対する知識や思考にばらつきがあるので、そのことに対応した分かりやすい学びが必要である。